

手仕事

知っておきたい
葬儀の知識

みんなのお弁当

Good handicrafts ① 永田れいさん(始良市在住・べるすた代表)
「楽しい！」を伝えたい。誰もが笑顔になれる「ロゼット」の魅力。



自作のロゼットを手にする永田さん。ロゼットは使用方法も無限。子どもたちのバッグにつけたり、マニティロゼットにしたりとアイデア次第でいろいろなデザインも生まれる。

「楽しい！」を伝えたい。誰もが笑顔になれる「ロゼット」の魅力。

笑顔になれる「場」を作りたい

永田さんは現在3才のお子様を持つお母さん。その傍ら、書道の先生として隼人と加治木に教室を持っているという多才ぶり。まだお子様が幼い頃は親子サークルも主催していたというから、その行動力には驚かされる。

「親子で一緒に気兼ねなく出かけられるところがなかったから、自分で作っちゃおうと思ったのがきっかけなんです。そんなお母さんたちが多いことに気づいて。それからは子育てをしているお母さんたちが気軽に集まれて話ができる、気持ち軽くなるそんなお手伝いできたかと思っているんです。お母さんが笑っていると子どもも楽しいし、何より喜んでくれるんですよ」という笑顔は自然なのに頼もしい。

「だからやっぱり楽しくないと！これからもロゼット作りを通じて笑顔になれるワークショップを開催していきたい。」永田さんが創るのは、華やかなロゼットに込められた、家族への想いのだろ

年前。

最近オシャレママたちに人気の「ロゼット」をご存知だろうか。誰もが思わず「かわいい！」と言ってしまいうロゼットとは、リボンなどで作られたお花の形をした勲章のこと。バラの花びらをイメージして作られ、海外では昔から「相手に敬意を表す」として、大切な相手に儀式で手渡しする風習があるらしい。

そんなロゼットの作り方を教えてくれる方がいると聞き、訪れたのは始良市。ロゼット UN-DECOR 認定講師の永田れいさんだ。

無限に広がる楽しみ

永田さんがロゼットに出会ったのは3



永田さんは様々なオーダーでのロゼット作成も受け付けている。



現在、コロナ感染予防のため、ワークショップは未定。始良・霧島方面の方なら3名以上で出張ワークショップを行っている。



べるすた代表 永田れい
日本習字清鈴支部 師範
ロゼット UN-DECOR 認定講師
連絡先: instagram bell_sta_aira
ロゼット専用 LINE @mpi6617d

南米のエクアドル原産の「スタン・ポベア・チグリナス」の花。「周囲にない植物に興味があわくんですよ」と川上さん。植物を通して、いろいろな国へ行き、人と出会ってきた。



珍しい植物で埋め尽くされる、川上さんの庭。通りがかりの人に「ここは沖縄みたい」と話しかけられるという。

異国のような小さな庭園で教わった、植物を育てる、もう一つの楽しみ方。

Good handicrafts ② 川上三芳さん（岐阜市在住）

川上さんの庭は、緑が濃い。うっすらと、いい匂いがする。見たことのない形の葉や花の植物が、小さな庭を埋め尽くしている。放っておくと、すぐにジャングルになりそうな密集した植物たちが、ちゃんと調和を保っているのは、こまめな手入れのせいなのだろう。

その五十坪ほどの庭で川上さんが育てているのは、ヤシ類、サボテン、ランなど熱帯植物八十種、二百七十本。命をほとばしらせて咲く花があったり、ひっそりと静かに佇むように咲く花もあって、庭全体が一つの生き物のようだ。

赤道直下に自生する花

「すごく珍しい花が咲いたんですよ」と、川上さんが教えてくれたのが、スタン・ポベア・チグリナス。南米のエクアドル原産のランの一種だそう。その花は、生き物が放つような温かな光で、庭の一角を明るくしている。とりわけ派手というわけではないけれど、どこか艶（えん）いた姿が心をとらえた。

川上さんは、その花を愛おしむような目でいう。「スタン・ポベア・チグリナスは高山植物で、赤道直下のアンデス山脈に自生しています。雲海の中に千メートルの崖が続く、雄大な滝もあるその土地は、世界の洋ランの原種が集まる所で、世界中の学者が、ヘリをチャーターして訪れるんです」。

育てることは旅すること

その植物の「育つ土地」を語る川上さんの熱いこと。「ご馳走を食べるより地図を見るのが好き」という川上さんはこう続ける。「頭の中にはいつも、世界地図が広がっているんで



す。その植物が育つ土地は、どんな気候か、どんな風景が広がっているのか、暮らしを想像してみるのが楽しい。自分の国以外の植物を育てるといことは、この庭に世界が凝縮されて、海外に行っているような気分になります。植物熱が何十年も続いているという川上さん。その理由は、おそらく、ただ植物が好きなかだけではない。植物を育てるを通して、異国の旅を楽しんでいる。小さな庭の向こうに、とても豊かな世界が広がっているのだ。

コロナの影響が続く昨今、「おうち時間」で植物を育てる人が増えているというが、川上さんの植物好きは、相当年季がはいっている。「小学校四年生くらい頃のサボテンを見て変わった植物だなあと、手作りのビニールハウスを作って越冬させたり。勉強はしないで夢中になって、父親からよく怒られました」。

なぜ熱帯植物なんですかとたずねてみた。「寒いところは嫌いだから」と川上さんは、大きな花がほころぶように笑った。



完全予約制プライベートネイルサロン
[ju Nail SAYURI ジュネイル サユリ]
連絡先：instagram @ju_nail_salon
LINE @668angnv

指先が変わると気持ちも変わる！爪のホームドクターのようなネイルサロン。

Good handicrafts ③ SAYURIさん（岐阜市在住）



SAYURIさんは、ネイリスト検定1級、ジェルネイル中級を取得。「ju Nail」は、娘さんの名前の「ジュナ」から。



施術前（写真左）と施術1年後（写真右）。「水をよく使う仕事かなど、その人の生活スタイルに合ったネイルを心掛けています」とSAYURIさん。

今や女性だけでなく男性も訪れるというネイルサロン。指先がきれいになると名刺を渡す時に自信が持てる、となかなか好評のようだ。そんな、男性も訪れるネイルサロンがあると聞き、向かったのは霧島市の「ju Nail（ジュネイル）」。完全予約制のプライベートサロンだ。

長年の夢を形に

オーナーのSAYURIさんがネイリストを目指し、本格的に活動を始めたのは三年前。SAYURIさん自身、十代の頃からネイルに興味を持ち、介護士として働きながら「お客様」としてサロンに通っていた。出産後、一念発起しネイリストの勉強を開始。育児と仕事に追われながらも、ネイリスト検定を受けて、見事一級を取得。ネイリストとして活動する傍ら、現在も勉強を続け、更なる技術の向上を目指している。

寄りそうからできる自爪育成

「爪は十人十色。一人ひとり、形も違います。生活のスタイルも違えば、お手

目指すのは爪のお医者さん

SAYURIさんのネイルサロンは完全予約制。ネイルサロンをオープンする時、「お客様と長くお付き合いし、ケアをしていきたい。」とアフターケアにも対応できるよう、少人数の完全予約制にした。「毎日使う指先がきれいだと気持ちも自然と前向きになれる。私自身がそうだったからこそ、お客様にも何かあったらすぐに来てもらいたい」と、どこまでもお客様目線で親身になってくれるから安心して通うことができる。

SAYURIさんが目指すネイルサロンは、指先から心を支えてくれる、かかりつけのお医者さんのようだった。

Text&Photo : Tomoko Takei

お葬儀のウチク

お別れの会（偲ぶ会）



新型コロナウイルスの影響で、葬儀とは別の「お別れの会」が改めて注目を集めています。お別れの会は、故人と親しかった方々とお別れの場ですが、そのスタイルはさまざまです。セレモニー形式で行う場合、宗教儀式や生花祭壇の準備などが必要となることもあるため、葬儀と同じく斎場やセレモニーホールがおすすめです。

(有) ピナール

情報誌

「sola」 広告募集

・新しくお店をOPENしました！
・こんなサービス始めました！
・地元で、もっと知ってもらいたい！
こんな時、solaに広告を出しませんか？

発行：年4回（春、夏、秋、冬）、
発行部数：10,000部（天国葬祭会員様主体）

◎広告のお申し込み・お問い合わせは
sola編集部 090-5021-6951（園田）
sonoda@tengokusousai.com

オーダーメイドやメンテナンスで、もっと演奏を楽しく！
そんな「ギターカルチャー」を発信するクラフトマン。



店内には、たくさん種類のギターが展示。



永野さんと奥様の彩乃さん（霧島市出身）。十代の頃、X-JAPANのファンという縁で、お互いのブログを通して知り合ったという。見るからに友だち夫婦で、仲睦まじい。



永野さん自作のオリジナルギター。自分でデザインしたボディで、カスタムギターやオーダーメイドのギターを作る。



フレット交換のピフォー（左）、アフター（右）。格段に、弾き心地や音色が変わってくる。



ギターを修理・メンテナンスしたり、世界にたった一つのギターを、オーダーメイドで作ってくれる、そんなギター・クラフトマンが永野さんだ。

霧島市に自分の工房を開いて約半年。「ギター工房は鹿児島市にはあるものの、霧島市にはなかったんです。地元の人やブルテレビで紹介していただいたことがきっかけで霧島市近辺のお客様に来てもらえるようになりまして。鹿児島市まで行かなくても、近くにできてありがたい」と。ギター一つで、こんなに喜んでもらえるとは。この地で工房を開くことができてよかったです」と笑う。

ギター少年からクラフトマンへ

ギタークラフトマンとは、ギター作りの「職人」のことだ。デザインから、木材選定、削出し、組立て、研磨、塗装調整というすべての工程をこなして、一本のギターを作り上げていく。お客さんの要望に応じた「カスタマイズ」や「リペア（修理）」なども重要な仕事のひとつだ。

岐阜県で生まれ育った永野さんは中学校生の頃は、J・POPなどの音楽が好きなギター少年だったという。しかし、岐阜の田舎町では修理するところもない。「楽器を弾くより、いじる方に興味が湧いて、大阪の有名楽器メーカーの専門学校に通った。ここではギター製作やリペアなどの木工技術だけでなく、音響工学、構造学なども学んだ。

しかし、その学校には「下宿して新聞配達をしながら通った」というのだから、大変な苦学生の実験している。「二年間、学校をやり遂げたことが、すごく自信になりました。それが認められて、メーカー直営の長野の工場に就職できたんです。その時代は遊べなかったけれど、ギターにどっぷり浸かれました」と。とにかくギターが好きでたまらないという気持ち

ちが、言葉の端々に表れている。

ものづくりの自信

リーマンショックで長野の工場が閉鎖した後、名古屋の木工の会社に勤めながら、プライベートでギターのリペアなどを続けた。あるとき、奥さんの実家に帰ることになった永野さんは「仕事さえできれば」と鹿児島へ。「霧島市では商工会などで自営業のことも学びました。ギター工房を作ることは名古屋や大阪などの大都会に比べて、ニーズがあるかな、という不安はありました。でも、ものづくりの自信はあったので、何とかできるかなと。

親戚が貸してくれた空き家を工房にでき、近所はやさしい方ばかりで、環境に恵まれたと永野さん。

「心がけていることは、お客様の立場に立って気持ちを汲み取る。自分でも弾いてみて、お客様の持つ「何となく弾きづらい」「音がしっくりこない」というふわっとした違和感を感じとる。そして必要な作業に落とし込むこと。そこは丁寧に行うと思っています。」

ギターカルチャーの発信基地

永野さんにとって鹿児島は、可能性の広がる土地だという。

「霧島市だけでも、いいギターがたくさん眠っている。マーチン（アコギを弾く人にとって憧れのブランド・ギター）を持っている人が多いのにびっくりします。使わないで、しまっているのは、リペアしたり、調整して使う文化がなかったんですね。オーダーメイドで作る、長く使える愛用品のようにメンテナンスする、そんな、ギターカルチャーを、この土地で起こしたい」と永野さんは目を輝かせる。

ギター好き、音楽好きの人が集まってくる、永野さんの工房。スペースは広いとはいえないけれど「音楽を楽しみたい」「いいギターに出会いたい」という空気に満ちている。この場所がギターカルチャーの新しい発信基地になる日は、きっと、そう遠くない。

パーソナリティ・インタビュー

あいらびゅーFM コラボ企画！！



渡辺秀文（わたなべひでふみ）さん 環境教育を行っている。NPO法人から始良市観光協会へ、そして掛け持ちでFMのパーソナリティへと多彩なキャリアを持つ。

—あいらびゅーFMのパーソナリティに興味を持ったのはどうしてですか？

観光協会に入る前から、「あいらびゅーFM」の立ち上げなどを通じて始良には様々な魅力があると感じていました。平成27年頃から始良市北山上地区で実施している「れんげ畑」を活かした地域活性化事業「れんげの里プロジェクト」にも関わっていましたので、始良市にコミュニティFM局が出来ると知って、こういった取り組みをPRすることにもつながるのでは、と思ったのが最初のきっかけでした。

—実際にFMに入ってみてどうでしたか？
開局時に集まったパーソナリティはみんなゼロからのスタートでしたので、最初は始良市のこともそこまで詳しくなかった状態でしたが、どんどん地元のことを知って始良市の様々なことを話題にし

てゆく様子が見ていて楽しく感じていました。ラジオは聴いてくれる方の顔が見えないので反応が気になることもありますが、観光協会の仕事でイベント会場にいたときに「いつも聴いていますよ」と声を掛けられドキッとしたこともあります（笑）

—担当番組・コーナーでおすすめのものは？
毎週金曜日、お昼12時から「きまぐれバードウォッチング」というコーナーを担当しています。始良市で見られる鳥の話題などをお届けしています。
—もともと鳥が好きだったのですか？
以前はカラスやスズメ、ハトくらいしか知らなかったのですが、前職のNPOに勤めていた際に環境保全の業務の担当になり、始良市にやってくる絶滅危惧種の渡り鳥「クロツラヘラサギ」を知ったのがきっかけです。それから鳥に興味を持ち、いつのまにか

休みの日には鳥を見に行くようになりました。
—ラジオでも伝えている「鳥」について、いちばん魅力的に感じているのはどんな点ですか？

知らないと思えないのですが、知れば知るほど見つけれられるようになって、以前と違う様子が気がついたりします。渡り鳥では春や秋など決まった季節にしか見られないものも。そういった鳥の様子に気がつくようになると面白いですね。

—これからどんなことにチャレンジしたいですか？
観光協会の仕事もFMのパーソナリティも、まちを好きになってもらう「まちづくり」という点では共通するものがあると思っています。鳥に気がつく面白さがわかってくるように、地元のことをより知ってもらい、愛着を持ってもらえるように始良市を盛り上げていきたいですね。



天國葬祭は、番組スポンサーとしてコミュニティFM放送局「あいらびゅーFM」の活動を応援しています。

SOLA 仕出し屋さん、応援企画!

テイクアウト やっています!

本物の仕出し屋さんの味を、おうちで楽しもう!

毎日食べても飽きない、
野菜ソムリエの
奥さんの提案弁当!



仕出し
とらや

始良市加治木町港町 49-2
☎ 0995-63-1515

彩り、味、栄養バランスの三拍子そろったお弁当の数々。一時的なブームではなく、長く愛してもらいたいという想いから、メインの他に、酢の物、白和えなど副菜にもこだわっています。



<メニュー (税込)>

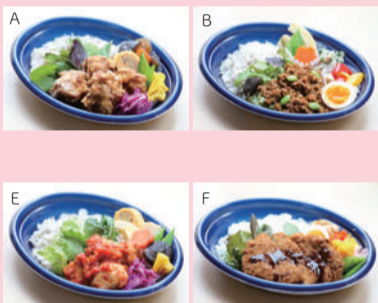
- ・唐揚げ 500円…A
- ・キーマカレー 500円…B
- ・チキン南蛮 500円…C
- ・手作りハンバーグ 600円…D
- ・チキントマトソース 600円…E
- ・トンカツ 600円…F

※白ごはんと雑穀米を選べます

<ご注文方法>

9時30分までに電話予約→テイクアウト

5個以上はお届けします



家族で楽しめる
豪華オードブルを
お得なセットで提供!



総合仕出し
福むら

始良市加治木町西別府 2427
☎ 0995-62-6634

城山ホテルの宴会洋食で腕を磨いた店主の作る、美しさとおいしさにこだわったオードブル。家族で楽しむもよし、おもてなしで振る舞うもよし。四季折々の地のものも存分に味わえます。



編集後記



●実は、私は人前で話す事が大の苦手。特に宴会前のスピーチを頼まれた時。つまらないスピーチをしてしまったなと、毎回終わるたびに落ち込みます。

●これを克服しようと、最近話し方教室に通い始めました。話し方教室では、毎回初めに1分間スピーチをします。前回は「人生で一番嬉しかった時」というテーマに、「たとえば「ひと言でいう」という言葉を入れる、というルールが加わりました。

●講師の先生いわく、短いスピーチをする時、この2つの言葉は魔法の言葉で文章の導入部分やまとめ部分で使う事により、限られた文字数の中で、言葉の優先順位が決まってくるそう。また他には、1つの文章が長くなり過ぎない様に、「。」を意識したり、しっかりと間をとったり、など沢山テクニックがあるようですよ。

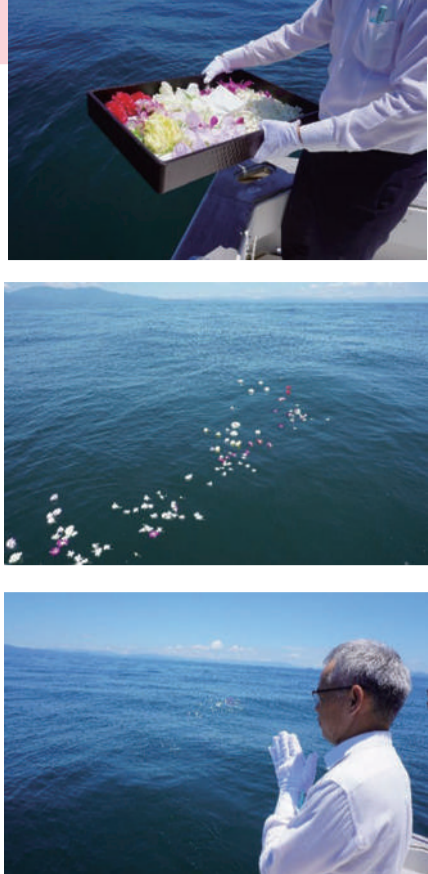
●ところで、最近テレビでよく見かける滝沢カレンさん。彼女の使う日本語やコメントはとっても独特で不思議な言語感覚です。彼女の後に巧みな話術でスラスラと話すインテリの出演者てらわれない、ひとで言う「無防備」に発せられる言葉に、不思議と微笑ましい気持ち湧いてきます。

●私の尊敬する福盛和夫氏が人に自分の思いを伝えたいと思えば「真剣に魂を込めて、一生懸命話すこと」と述べられています。

●私が話し上手になる道のりは、まだまだ長そうですが、「発する言葉はその人の生き方そのもの」を念頭に置く事が大切。たとえば、特に今コロナ禍で人と面と向かって話す事が貴重になっている今だからこそ、言葉一つ一つを大切に、友好的な関係を人々と構築していきたいです。

(米丸麻希子)

新しいお見送りのスタイル 海洋葬 スタッフ・レポート



依頼者は霧島市在住のS様、退職を機に関西から鹿児島にいられたご夫婦。6月某日、午後1時頃、七ツ島のマリナーボートから出航。船は小型のプレジャーボート、船長の難波さんは若いながらも経験豊富な頼りになる海の男というイメージ。天気は快晴で、波も非常に穏やか。船上で受ける海風は普段感じるのとは異なる感覚で、とても気持ちよかったです。いよいよ出航。発動機の音を響かせて、船は低速で沖へと進んでゆく。防波堤を過ぎると船は速度を上げて、全

天国葬祭では海洋散骨プランを二つご準備しています。一つ目は「チャータープラン」、船をチャーターし、同乗して散骨するプラン。二つ目は「おまかせプラン」、お骨をお預かりして弊社のスタッフがご家族に代わって散骨するプランです。今回S様は「おまかせプラン」をお選び頂きました。散骨とは、ご遺骨を自然に撒いて供養する「自然葬」の一つで、お墓を購入、維持する負担が無いことや、お墓を維持することの困難なご家族が墓じまいのために行うなどが大きな特徴です。それでは、海洋散骨が実際にどのようなように行われているのかをお伝えしたいと思います。

丁寧に海面へと浮かべる。パウダー状になったご遺骨は、穏やかな潮の流れに漂いながら、まるで袋の中から解放されたことを喜ぶように海の中へと広がります。そして、還っていった。ご遺骨を海へと還したあと、献花を水面に浮かべ、献酒を行ったあと、船は再び動き出した。漂う献花を中心にして円を描くように、海上を左回りに小さく2周する。この行為の理由を船長に聞くと、「故人

身で浴びる潮風が心地良く、足元からダイレクトに揺れが伝わってくる。今まで桜島フェリーしか乗ったことがない私にとって、新鮮な体験。眼前に桜島を見ながら、穏やかな初夏の日差しに照らされた、澄んだブルーの海、海から見る陸地の景色は美しかった。出航してから20分ほど、錦江湾の中心に近づくと、船長が船の速度を緩めて、波が穏やかな場所を探す。「このあたりでどうですか?」行き交う船もなく、波が穏やかな場所。私はおもわず「いい場所ですね」と答え、散骨の準備を始めた。

錦江湾の眺望、海の静けさ、匂い、その全てに神聖さを感じられ、美しい自然にご遺骨を還すという意味では、まぎれもなく立派な供養であると言えらると思います。生命の役割を終えて、母なる海へと還っていくのです。別れがさみしい思いもあるかもしれませんが、故人やご遺族にとって、自然の流れ、生命の流れを感じられる、温かいお見送り方法だと思えます。

ご家族は世界中、どこにいても、海を眺めればいつでも故人のことを思い出して供養ができる—そんな想いで、海洋散骨を選ばれました。散骨を終って、桜島を背に船は元来た海路へと進む。水面は、空から振る注ぐ太陽の光で、キラキラと輝いている。とても美しいその光景に、故人を偲ぶために、これほど相応しい景色はないだろうと感じた。

(リポーター / 山下 哲也)

TENGOKU STAUFF 裏方としての仕事

美坂 明朗 (みさかあきろう)

私は、最初アルバイトとして天国葬祭に入社しました。予想以上に裏方としての業務があり、驚きでいっぱいでした。その業務の中で先輩たちの動きを見ながら一つ一つ仕事を覚え、ようやく指示を受ける前に動けるようになってきたと思えるようになったとき、正社員として採用していただきました。お客様と接することも多くなり、責任感も増していきました。お客様と接するに当たり、改めて先輩方にマナーや言葉使いなどを指導していただいております。覚えることもさらに増えてたいへんではありますが、上司から「なにかあったらフォローするから思い切りやれ、中途半端が一番良くない」と声を掛けられました。その言葉を聞いて思い切つてやろうと決心しました。多くの経験を積ませていただき、自分の視野が広がってきて、様々なことに対し、以前よりもスムーズに対応することができてきました。またご葬儀のたびに新たな発見もあり、先輩方に「同じ葬儀は二度とない」と言われたことが、ようやくわかってきました。日々勉強をさせていただいております。葬儀終了後にご遺族に「良いお葬式ができた」と思ってもらえるよう努力を惜しまず、これからはがんばってまいります。